ザ・AZABU

Community Information Paper
No.70 March 19, 2026
発行／港区麻布地区総合支所
編集／ザ・AZABU編集室　〒106-8515 東京都港区六本木5-16-45
電話／03-5114-8812　ファックス／03-3583-3782
暮らしの疑問は、「みなとコール」でお答えします。電話／03-5472-3710

麻布地域の人々が取材 編集する地域情報紙

ザ・AZABU 祝70号

麻布地区総合支所では、麻布地区の地域情報の発信及び地域情報の収集のため、「地域情報紙 ザ・AZABU」を発行しています。2006年5月に創刊準備号を、続いて10月に第1号を発行、20年を経て、今号で70号発行の歴史を持ちます。毎号、編集委員がアイデアを持ち寄り、紙面の内容を決めていきます。

表紙に取り上げる題材に決まりはありませんが、写真をなるべく多く、サイズを大きく使って紹介できるよう、ヴィジュアルを重視しています。

2013年3月発行　23号で「アートな麻布に魅せられて」というタイトルが登場。麻布十番商店街の奥、南山小近くにふわりと浮かぶパブリックアート「KUMO」の作者、五十嵐威暢（いがらしたけのぶ）氏のインタビューと作品を取り上げました。その後、同じく十番商店街パティオにある「きみちゃん像」の作者、佐々木至（ささきいたる）氏（24号）、六本木けやき坂通りのストリート・ファニチャー「愛だけを…」の作者、内田繁（うちだしげる）氏（25号）にも登場していただき、興味深いお話を伺っています。

また六本木交差点に佇む、平和と復興のシンボル、本郷新作「奏でる乙女」（33号）、有栖川宮記念公園に立つ朝倉響子作「新聞少年の像」（54号）などは、作品の歴史や背景などに迫って紹介しています。

アートは様々な捉え方ができますので、紹介の範囲は多様です。建物そのものがアートなので、麻布台のアフガニスタン大使館（40号）、南麻布の旧石丸邸（42号）、麻布台の和朗フラット（50号）などレトロ建築を詳しく紹介。もちろん新しい建物にもフォーカス。麻布図書館がリニューアルオープン（29号）。麻布十番に新規オープンしたハンガリー文化センター（後にリスト・ハンガリー文化センターに名称変更）（51号）などにも伺って紹介しています。

興味深いところでは、麻布に残る唯一の銭湯、竹の湯の見事な帆船のタイル壁画（43号）、麻布にあった大名屋敷にちなみ、鎧兜の和の意匠に着目して紹介（44号）など、ユニークなアートを紹介しています。

これからもどんなアートに巡り会えるのか、興味津々、ワクワク気分です。今後80号、さらに100号目指して、魅せられるアートを探していきましょう。読者の皆様からの提案も歓迎です。

また、港区のHPでバックナンバーを読むことができます。

（文／高柳由紀子）

麻布びと

未来へ残したい麻布の声

津軽三味線奏者・民謡歌手
近藤千晶（こんどうちあき）さん（27歳）

津軽三味線の音色に麻布の記憶をのせて。伝統と未来を紡ぐ麻布撫子

幼い頃から津軽三味線と民謡を学び、大学卒業後、津軽三味線奏者・民謡歌手として活動を始める。近年はシンガーソングライターとしても表現の幅を広げている若き邦楽界のホープは、また生粋の麻布っ子でもある。そんな近藤千晶さんに今までの歩みと現在の想いを伺った。

老舗寿司店を営む祖父母とともに。祖母と民謡の稽古に通い始めた頃。

若い女性の津軽三味線奏者・民謡歌手は、希少な存在だ。生まれた時から麻布とともに歩んできた彼女は、どのようにして日本の伝統音楽の道へ進んだのだろうか。

「寿司店を営む両親の仕事の関係で、祖母と過ごす時間が多かったんです。祖母は民謡を習っていて、その稽古についていったのがきっかけでした」

民謡を始めたのは、わずか3歳の頃。民謡を身近に楽しむ家庭に育ち、彼女は四世代目にあたるという。民謡の師匠が秋田出身で稽古時の伴奏が津軽三味線だったことから、その音色に心を奪われ、「自分も弾いてみたい」と思ったのが6歳。そこから津軽三味線の稽古が始まった。

27歳にしてすでに稽古歴は20年以上。だが、当初からプロを目指していたわけではない。

「大学時代は、卒業後に何をしたいのか正直よく分かっていませんでした」

転機となったのは、就職活動中に参加した自己分析セミナーだった。「もし明日、地球に隕石が落ちてくるとしたら、今日本当にやりたいことは何かを考えてみてください」という問いに、真っ先に浮かんだのが“音楽”だったという。

「その時初めて、心の底からやりたかったのは音楽なんだと気づきました」

ちょうどコロナ禍の最中、就職活動と並行してYouTubeに津軽三味線の演奏動画を投稿し始めたところ、邦楽ロックバンドから声がかかり、2020年10月より本格的に音楽活動を開始。南青山の能楽堂・銕仙会での演奏をはじめ、フランス、ポーランド、タイなどでの海外公演も経験。有名ロックギタリストとの共演など、ジャンルを越えた活動を重ねてきた。

近年は、トランペットやピアノ、二胡など他楽器との共演も多く、地元の盆踊りやいきいきプラザ、母校（小学校）の秋祭りなど、港区内で演奏する機会も増えてきた。

また、「Cheek Eee（チーキィ）」名義でシンガーソングライターとしても活動している。

「自作曲を宮城県塩釜市のコミュニティラジオのオープニングに使っていただき、とても嬉しかったです。民謡と三味線をルーツに、新しい音楽表現を模索しています」

保育園から大学まで（高校時代を除き）麻布周辺で過ごした彼女にとって、この街は特別な存在だ。

「小学校には、ハンガリーやフランス、ミャンマー、韓国、中国、台湾など、国際色豊かな同級生がいました。子どもの頃は当たり前だと思っていた環境が、実はとても特別だったと後になって気づきました」

その経験から、大学では国際文化協力を学んだ。

「地方や海外での公演から戻ってくると、心からホッとします。麻布は都会的な印象が強いですが、私にとってはとても静かで落ち着ける街。自然も多く、坂道があり、古いものと新しいものが混ざり合っている。そのバランスが魅力だと思います」

日本の伝統を受け継ぎながら、新しい音楽の形を模索する彼女の姿は、変化を受け入れながら歴史を重ねてきた麻布の街とどこか重なる。

最後に、将来の夢を尋ねた。

「和楽器や民謡を始めたい若い人は、年々減っています。津軽三味線と民謡をベースに、自分が“かっこいい”と思える形で表現しながら、癒しの音も届けたい。同世代や、もっと若い世代へ繋げていけたらと思っています。音楽は、言葉や国境、世代を越えて人をひとつにできる力がある。将来はUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の親善大使として、音楽で平和に貢献することが夢です」

自分にできること、やりたいこと、やるべきこと。そのすべてが重なった現在の活動に、彼女は真摯に向き合い続けている。「日々の活動ひとつひとつに心を込めて音を届けたい」。その想いをのせた津軽三味線の音色は今日も、麻布の街に新しい物語を響かせている。

近藤千晶さんのWEBサイトとYouTubeのリンクはこちら

●近藤千晶　公式WEBサイト
https://chiakikondo.studio.site/

●YouTube
https://www.youtube.com/@chiakikondo3211

パンフレットやプロフィールを載せたカード、写真の数々。幼い頃の写真や地域の祭りでの演奏の写真も見られる。

明治記念館「芙蓉の間」での演奏の様子

2025年に開催された日本民謡協会西東京連合大会成青年部で優勝したときの写真

（取材／飯泉千種、鍵谷芳勝、田中康寛　文／飯泉千種、田中康寛）

ミレーン・デ・ホヤ・ガルシア＝アルバノ特命全権大使

フィリピン共和国
面積：298,170平方キロメートル（日本の約8割）
首都：マニラ（首都圏人口約1,400万人）（2024年フィリピン国勢調査）
言語：国語はフィリピノ語、公用語はフィリピノ語及び英語。180以上の言語がある。
元首：フェルディナンド・マルコス大統領
議会：二院制
上院24議席：任期6年、連続三選禁止
下院311議席：任期3年、連続四選禁止

参考：外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/philippines/index.html

取材／フィリピン共和国 大使館

大使を訪ねて
麻布の"世界"から

Republic of the Philippines

TOKYO

未来をともに織りなす街、麻布から
―日比外交70周年、その先へ

女性初の在日フィリピン大使が見つめる、街・文化・次世代

東京都港区六本木にある在日フィリピン共和国大使館で、ミレーン・デ・ホヤ・ガルシア＝アルバノ特命全権大使（以下、アルバノ大使）は、フィリピン初の女性在日大使として日々の活動に取り組んでいる。弁護士としての経験を持ち、公共政策や国際分野でキャリアを重ねてきたアルバノ大使は、2023年から日本で大使を務めている。人々との対話を大切にしながら、人と人、文化と社会をつなぐ姿勢は一貫している。日比国交正常化70周年を迎える今、その思いは、多文化が自然に共存する麻布の街、そして次の世代が生きる未来へと向けられている。

1 首都マニラの正式名称は「メトロマニラ」。マニラ市ほか17の行政地域の集合体でメトロマニラ（マニラ首都圏）を形成している。

2 日本人にも馴染みのある人気観光スポット、セブ島。どこまでも続くスカイブルー、白い砂浜は、誰をも魅了する。日本から直行便があり、便利。

麻布という、理想的なコミュニティ

「麻布は、多文化が自然に溶け合い、人が安心して暮らせる街です」

アルバノ大使は、麻布をそう語る。多くの大使館が集まる国際的な街でありながら、家族連れや高齢者、働く人々が心地よく共存する環境がある。外国公館を代表する立場でありながら、街を歩くと感じるのは緊張ではなく、温かさと安全性だという。

日比外交70周年が示す歩み

2026年、日本とフィリピンは日比国交正常化70周年という大きな節目を迎える。戦後の和解から始まった両国関係は、法の支配や民主主義といった共通の価値を土台に、経済、人材育成、安全保障まで幅広い分野で発展してきた。今日では、インド太平洋地域における重要な戦略的パートナーシップとして、その存在感を高めている。

「織る」という象徴に込められた思い

70周年のテーマは「未来を共に織りなす：平和、繁栄、可能性」。記念ロゴには、フィリピン初の対日輸出品であるアバカ（マニラ麻）と、日本のしめ縄が描かれている。異なる文化の繊維を撚（よ）り合わせ、一本の強い絆を生む――その姿は、70年にわたる日比関係そのものを象徴している。

麻布にある、フィリピン文化の窓

その「織りなす」文化を体感できる場所が、麻布にある。在日フィリピン大使館内の文化拠点「セントロ・リサール東京」だ。文学作品や歴史資料に加え、伝統織物や民族衣装をまとった人形、楽器などが展示され、フィリピンの多様な文化が静かに息づいている。織物は単なる工芸品ではなく、自然や暮らし、地域の記憶を語る存在だ。

人と人が支える、次の70年

日本には34万人以上のフィリピン人※が暮らし、文化交流や地域イベントを通じて、日常の中で両国は結ばれている。初の女性在日フィリピン大使としてアルバノ大使が見据えるのは、次の70年だ。気候変動や孤立・孤独といった共通課題に向き合いながら、文化と対話を通じて、より包摂的な社会を築いていく。その未来は、すでにこの麻布の街角から、静かに織り始められている。

＊＊＊

日比外交70年の物語は、強固な人的交流の歴史である。

文化や人のつながりとして、麻布の街の日常に静かに息づいている。

そして、その広がりは日本の外にも続いている。

アルバノ大使、お忙しい中取材へのご協力、ありがとうございました。

※出典元：出入国在留管理庁 報道発表資料「2025年6月末現在における在留外国人数について」
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00057.html

フィリピン共和国大使館HP
https://tokyo.philembassy.net/ja/

3 ルソン島南のドンソール周辺は、世界最大の魚、ジンベイザメの通り道として知られる。体長12mに及ぶジンベイザメと一緒に泳ぐジンベイスイムが人気。

4 フィリピン版かき氷の「ハロハロ」はタガログ語で"混ぜこぜ"の意味。かき氷の上にフルーツ、アイスクリーム、ココナッツなどがトッピングされていて、フィリピンでは1年中いただける。

5 世界遺産のビガンの歴史地区。マニラの北約400kmにあり、16世紀のスペイン統治時代につくられた石畳の通りや町並みがそのまま残されている。

6 世界遺産、バロック様式教会群の一つ、ルソン島のパオアイ教会。フィリピン人によってデザインされた数少ないスペインスタイルの教会。

麻布 × セブ島
遠くて、どこか似ている二つの街

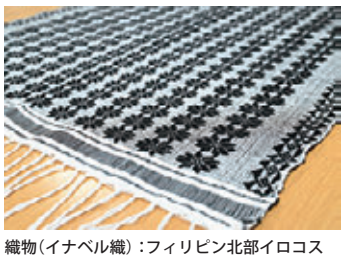
日本人にも馴染み深いフィリピンのセブ島。この島は地理的には麻布とは異なるが、青い海と穏やかな人々で知られるこの島と、麻布の街とも共通点がある。それは、国籍や文化の違いを超えて、人が自然に混ざり合う空気だ。観光地でありながら生活の場でもあるセブ島、国際色豊かでありながら日常が息づく麻布。アルバノ大使がこの街に居心地の良さを感じる理由も、そこにあるのだろう。海を越えても変わらない、人と人の距離の近さ。それこそが、日比関係が育んできた最も大切な価値なのかもしれない。

PICK UP 日比外交70周年 文化イベント開催

※2026年は、映画祭、フードフェスティバル、伝統文化公演など、日比の共通の価値と文化に触れる記念イベントを開催予定。詳細は在日フィリピン共和国大使館公式サイト・SNSにて随時発信。

セントロ・リサール東京：在日フィリピン大使館内に設置された図書館。フィリピンの歴史や文化、文学に関する書籍や資料を所蔵し、日本における文化発信の拠点となっている。

ホセ・リサール像：在日フィリピン大使館内の図書館名にもなっている、19世紀フィリピンを代表する思想家・作家・医師。『ノリ・メ・タンヘレ』『エル・フィリブステリスモ』などの文学作品で知られ、国民的英雄として親しまれている。



織物（イナベル織）：フィリピン北部イロコス地方発祥の伝統織物。自然や環境をモチーフにした模様が特徴。

人形：フィリピン各地の伝統衣装をまとった人形。ピニャ（パイナップル繊維）を用いた衣装など、織物文化の広がりを伝える。

楽器（クリンタン）：フィリピン南部ミンダナオ地方に伝わる、真鍮製のゴングを用いた打楽器。祭礼などで演奏される。

●写真提供／1～6 フィリピン政府観光省 （取材／小堀繭子、高柳由紀子 文／小堀繭子）

セバスチャン・マルタン氏プロフィール

- 1977年 フランス・ナント生まれ
- フランス・ブルターニュ、イギリス、イタリアなど、フランス料理の一流レストランで修行し、経験を積む
- パリの「ステラマリス（Stella Maris）」吉野建氏の下で和食を学ぶ
- 2003年 二つ星レストラン「ラトリエ ドゥ ジョエル・ロブション」六本木ヒルズ店オープニングに際し、来日
- 2004年 在日フランス大使館総料理長（現職）就任
  大使館や一流ブランドのイベントやレセプションを手掛ける

編集委員が行く！ あざぶ食遊記 9

麻布で20年。フランス大使館シェフが語る、料理がつなぐ日仏の架け橋

フランス大使館で20年以上にわたり厨房を支えてきた、ブルターニュ出身のシェフ、セバスチャン・マルタンさん。料理を通して人と文化をつなぎ、日本各地の食材とも向き合ってきた公邸料理人としての仕事と、その想いを紹介する。

France

ブルターニュで育った料理人

フランス北西部ブルターニュ半島。海に囲まれ、魚介や乳製品など、土地の恵みを生かした食文化が根づく地域だ。セバスチャンさんは、パン屋とクレープ屋を営む父のもとに生まれた。その姿を見て、幼い頃から料理人になりたいと思った。

「ブルターニュ料理はシンプル。いい食材があれば、それ以上手を加えません」。限られた食材を無駄にしない知恵や、保存の工夫も日常の中に自然とあったという。

セバスチャンさんの郷土料理「ガトー・ナンテ」 写真提供:セバスチャン・マルタン氏

日本人料理人との出会いが、日本への関心を深めた

料理学校を卒業後、フランス各地やイタリアで修業を重ねる中、日本人料理人と一緒に働く機会が多くあった。

「日本人はとても真面目で、技術や段取りを大切にするところが自分の考え方ととても良く似ています」。下処理を丁寧に行い、素材を最後まで使い切る姿勢。派手さより完成度を重視すること。そうした考え方に親近感を覚え、日本で料理をすることに自然と惹かれていった。

2004年、六本木のレストランで働いていた頃、在日フランス大使館の公邸料理人が退職するという話を耳にした。大使館の仕事に興味を持ち、面接を経て採用が決まる。「料理のテストはありませんでした。人柄や考え方を見ていたのだと思います」。その選択が、20年以上続く仕事につながった。

大使館シェフの仕事とは「料理でもてなすということ」

大使館の仕事は、行事や来賓ごとに内容が異なる。会食は着席で最大120人、パリ祭などの大きなレセプションでは1500人分の料理を出すこともある。現在は3人の専属スタッフと忙しい時は応援を頼み厨房を回している。「人数が多いほど、段取りが一番大事です」とセバスチャンさん。ソースや煮込みは事前に仕込み、当日は迷わず動けるよう準備を徹底する。

料理はブルターニュに限らず、場に応じて南仏やアルザスなどフランス各地の郷土料理を作る。日本の魚や野菜をフランス料理の技法で仕上げる際には、味のバランスを特に意識するという。「日本料理もフランス料理も、ベースやソース、出汁を大切にするところは似ています」。その共通点を意識しながら、一皿一皿を組み立ててきた。

また、日本の食材を使う際、ブルターニュとの共通点も強く感じるという。「海が近く、季節で食材が変わる。発酵や保存で旨みを引き出す考え方も似ています」。魚介の鮮度を重視すること、素材の味を尊重すること、シンプルな調理で旨みを引き出す考え方など、根っこの部分で通じ合っている。

こうした日々の仕事を続けるうちに、セバスチャンさんの関心は「料理を作ること」だけでなく、その背景にある日本各地の食材や生産地、人々へと自然に広がっていった。

Menu

1. 中村の「ゴールデンエッグ」、セヴルーガキャビアのクリームとライム
2. 能登半島産の小さな野菜のフロリレージュ、マカダミアのフムス
3. 優しいスパイスが香るヴルーテ（滑らかなスープ）
4. 繊細なワタリガニのジュレ、カリフラワーのクレムー
5. ブルターニュ沿岸産オマール海老、グリーンピースのクレムー、ピリ辛パプリカの滑らかなソース
6. チョコレートの盛合せ。ミルク＆ピーナッツ、ダーク＆エスプレット唐辛子、オレンジ＆バニラ＆キャラメル

写真提供:セバスチャン・マルタン氏

日本各地を訪ね、食材と人に出会う

「ブルターニュ人は旅が好きなんです。知らない土地に行って、食材を見て、人と話す。それが一番の勉強になります」。その気質は、料理人としての原点にもなっている。

宮城、能登、福井、鹿児島、宮崎――。実際に日本の食材の産地を訪ね、生産者と話し、地元の食堂で食べることで、料理のイメージがよりはっきりしてくるという。

中でも驚いたのは、日本の牛肉の産地ごとの味の違い。「同じ牛でも、場所が違うと全く違う」。その体験は料理に生かされている。

大使館の仕事の中で、そうした日本各地の食材を使い、その背景を伝えることもある。「料理を通して、生産地の話ができるのは大切なことです」。それは結果的に、地方の魅力を伝えることにつながっている。

左）石川県七尾市能登島の生産者を訪ねて　右）宮崎県関村の漢方和牛牧場にて
写真提供:セバスチャン・マルタン氏

麻布という街で続く、日常の交流

麻布は、セバスチャンさんにとって仕事の場であり、長年暮らしてきた生活の拠点でもある。フランス大使館での仕事を通して、地域とのつながりも自然と深まっていった。

特に印象に残っている仕事として挙げるのが、麻布周辺の学校や子どもたちと関わった経験だ。フランス人学校の子どもたちが大使館を訪れ、一緒に料理をしたことがあるという。「子どもたちが、真剣な顔で野菜を切ったり、ソースの匂いをかいだりする姿がとても可愛くて。大きな公式行事よりも、こういう時間のほうが強く心に残っています」。

セバスチャンさんが調理をする動画を撮り、麻布の小学校でフランス料理を給食に取り入れる活動にも関わり、給食を通じてフランスの食文化を伝えている。料理を通じた交流は、特別な場だけでなく、日常の中にも息づいている。

将来については「まだ夢の話」としながらも、少し照れたようにこう語った。「いつか、父と同じように海の近くで小さなベーカリーやレストランができたら」。

フランスと日本、二つの海に育まれた料理人の歩みは、これからも静かに続いていく。

フランス大使館　http://www.ambafrance-jp.org/

X（旧Twitter）　Facebook　Instagram

（取材／堀内明子、高柳由紀子　文／堀内明子）

まちのお役だち 19

六本木ヒルズ盆踊り

森ビルが生んだ歌手 六本木じろう

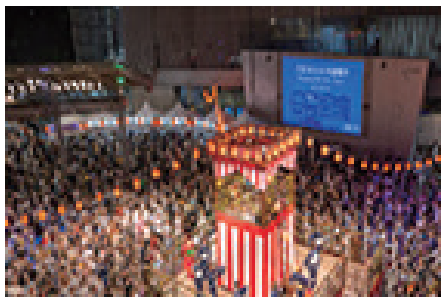
六本木じろうさん

六本木じろう（本名・川崎俊夫）さんは中央大学商学部を卒業後、森ビル（株）に入社した。森ビル管理（株）取締役、森ビル流通システム（株）常務取締役、森ビル（株）取締役を経て（株）ラフォーレ原宿代表取締役社長に就任する。同社顧問を最後に退任し、第二の人生をボランティア活動にライフシフトする。ご両親が介護施設でお世話になった恩返しで計画していた特別養護老人ホーム等で昭和の歴史を振り返る話とともに、昭和の流行歌を入所者と一緒に歌い、健康と笑顔、ストレスの発散などを目的とした歌唱と説話の奉仕活動に従事している。コロナパンデミックが始まってからは、YouTubeチャンネル「エムむすび」で動画配信も行うようになった。森ビル（株）時代は全商業施設の管掌役員として、けやき坂イルミネーション、ハロウィンパーティー、東京国際映画祭など、六本木の街づくり、また、表参道ヒルズなどの原宿の街づくりに携った。ヒルズ竣工時には森ビル（株）と六本木ヒルズ自治会の共催による新しい六本木の街にふさわしい六本木ヒルズ盆踊りを仕掛けて六本木じろうの名前で歌手デビューも果たした。介護施設入所者を癒すために自身の車でカラオケセットを運び、施設で自らセットする姿を見ると、じろうさんの第二の人生に共感と憧れを抱いてしまう。気がかりは「六本人音頭」の後継者問題である。プロにお願いすればギャラが発生する。そこで「六本人音頭」を歌いたいという素人の方々に集まっていただき、テレビ朝日のスタジオでオーディションを実施したことがある。審査員はじろうさん、日本舞踊「花柳流」師範花柳糸之さん、自治会のコミュニティ部会長の伊藤春日さん他だった。オーディションを盛り上げるため筆者もトライしたのだが敢えなく落選する。

「六本人音頭」のこぶし回しと声質は地元愛着のじろうさんしかマッチする歌手はいない。ただ、じろうさんも高齢であり、後継者が現れないなら、じろうさんを模した生成ＡＩに歌ってもらうことになるのだろうか。「六本木じろう」＝「六本人音頭」のゆえんなのだろう。

じろうさんの歌の休憩時間に。左から、じろうさん、毎年盆踊り参加の伝説のミューズ、小林麻美さん、筆者

六本木じろうさんの歌手デビュー曲「六本人音頭」



六本木ヒルズ、ヒルサイド1階けやき坂コンプレックスから見た盆踊り

「六本人音頭」は、毎年麻布十番納涼まつりと時期を同じくして八月下旬の（金）（土）（日）の三日間、六本木ヒルズアリーナ（多目的広場）で開催される六本木ヒルズ盆踊りで歌われる音頭である。

六本人音頭は、今まで作られた「六本木音頭」や「六本木小唄」と異なり、「木」でなく「人」の文字がつく音頭である。六本人とは「六本木に住む人、働く人、遊びに来る人」の呼称で、六本木ヒルズ完成の折り、キャッチコピーとして誕生した。六本木にはたくさんの神社があり、独自の伝統例祭が行われ、町会ごとの祭りもある。当時、森ビル（株）のイベント責任者だったじろうさんを中心に素人が自主的に企画し、大勢参加できる盆踊りや六本人音頭づくりに携った。歌手を夢見、歌に自信のあったじろうさんに森ビルオーナー故 森稔氏から「面白いことを企画したね。それなら盆踊りの時は君が生歌で櫓の上で歌いなさい」と言われ白羽の矢が立ったのである。森ビル（株）社員有志が作詞し、山移高寛氏が作曲した「六本人音頭」は、当初六番までだったが、オーナー夫人 佳子さんから「六本木はこれから文化の街となる。美術館も歌詞に入れて」と要請があり、結局九番までになる。例えば二番「ハァ～雲の上から朝日を見れば、きっと幸せやってくる、映画を観たり買い物したり美味しい料理に舌鼓、世界を変える六つの輪、楽しさいっぱい六本人ソレヨイヨイヨイ、ソレヨイヨイヨ～イ」といかにも素人が作った詞だが、曲にマッチして最高に楽しい音頭である。六本木の時代の流れや変化とともに歌詞も増えていくのだろう。太鼓は湯島天神所属の白梅太鼓の奏者が、さらに一段高い櫓で踊りを盛り上げる。振り付けは花柳さんによるもので、花柳糸之社中の華やかな娘さんたちが当日櫓の上で歌手じろうさんを囲んで踊る。「東京音頭」「花火音頭」、子どもたちが大喜びの「ドラえもん音頭」も歌われるが、最初も最後もアンコールでも「六本人音頭」は何回となく歌われる。とにかく、こうして六本木ヒルズオリジナル盆踊り曲、六本木じろうさんが歌う「六本人音頭」が完成したのである。

六本人音頭の盆踊り風景

六本木ヒルズ盆踊り前夜祭で演じられる楽劇六本木楽

中世京都を中心に全国的に大流行した芸能「田楽」は、豊作を願う田植えの儀式や祭礼から生まれた。鎌倉時代以降、曲芸や芸能的要素が加わり「田楽法師」という芸人も生まれた。しかし室町時代に猿楽や能楽の発展により衰退した。それを狂言師 故野村耕介（五世万之丞）氏が中心となり現代に「大田楽」として復活させた。さらにそれを六本木ヒルズバージョンとして取り込んだのが楽劇六本木楽である。特定非営利活動法人ACT.JTのご指導のもと、森ビル（株）、六本木ヒルズ自治会のご協力で毎年六本木ヒルズ盆踊り前夜祭で演じられる。山伏神楽に想を得て勇壮かつ軽快に踊る番楽は、大田楽を学び継承するセミプロ集団「わざおぎ」や高齢者から小学生まで参加できる。1か月半の稽古を積み重ねて踊り手の団結を紡ぎ、大鼓、笛のアップテンポなリズムに合わせて踊る躍動感あふれる演舞である。最後に、演舞者と観客が入り乱れて一緒に踊る乱舞に至ると、会場全体が熱狂の渦に巻き込まれる。観客はいろとりどりの装束と奏でられる楽器に魅了され、壮麗な空間に浸りきる。長年最高齢の踊り手として参加を続ける筆者も、老若男女・大勢の外国人が一体となり踊る様に世界が一つの輪になった感覚に陥り、至福の幸福感に浸ってしまう。

装束をつけた集合写真

楽劇六本木楽の番楽踊り

区立六本木中学校での楽劇六本木楽練習風景

（取材・文／鍵谷芳勝）

妙壽寺客殿（旧鍋島子爵邸）大広間 1 3、外観 2

麻布の軌跡

鍋島子爵邸

明治中期に狸穴町1番地に建てられた鍋島子爵邸*が、護国寺と妙壽寺に分割して移築され、ともに現存していることを前号で紹介した。今号では建物の来歴をひもときながら、まちの変遷やゆかりの人物を紹介したい。

＊狸穴の地名は、明治5（1872）年に「飯倉狸穴町」、明治44（1911）年に「狸穴町」、昭和22（1947）年に「麻布狸穴町」と改称されているが、本稿では「狸穴町」に統一した。また本稿の「鍋島子爵」は旧蓮池藩主家を指すが、旧鹿島藩主鍋島家、旧小城藩主鍋島家も子爵である。

明治期の狸穴町

旧肥前国蓮池（はすのいけ）藩第9代当主鍋島直紀（なおただ）は、明治維新後もしばらくは藩邸があった新龍土町12番地（現六本木7丁目3～4）に居住していたが、直紀逝去後の明治26（1893）年頃、第10代当主鍋島直柔（なおとう）が狸穴町1番地に転居する。

当時の様子が島崎藤村著『大東京繁昌記』に記されている。飯倉交差点から飯倉片町に向かう道（現在外苑東通り）は、「左側には鍋島、松平、都築、有賀、相良などの諸邸があり、右側には稲葉邸、徳川邸、星邸など、いずれも宏壮な邸宅で、堂々たる高塀と門とが並び」「大正元年までは電車も通っていず、真昼間といえども森閑としていた」という。

関東大震災後のまちの変貌

大正12（1923）年に関東大震災が発生。復興計画の一環として霞ヶ関へ中央官庁を集中することが決まる。霞ヶ関の計画エリアにあったソビエト（現ロシア）連邦、イタリア、ベルギー、中華民国の各大使館/公使館の移転先として、当時まだ広大な面積を残していた旧大名屋敷地が候補にあげられ、狸穴町の鍋島子爵家と隣接する都築男爵家の敷地（計4,433坪）はソ連大使館、はす向かいの徳川侯爵邸の一部（現在外務省外交史料館本館）は中華民国公使館の移転先に選ばれた。

自邸地の売却を決断した第11代当主鍋島直和は、富士見町28番地（現南麻布4丁目）の洋館に仮住まいしたのち、青山南町に「南フランスにあるような」洋館を建てて移り住んだ。陸軍時代にフランス駐在経験があり、外国人との交流にも積極的であった直和は、洋館での生活を選択したのだろう。狸穴町の旧邸は、玄関部分が護国寺へ、直和の結婚に際して明治37（1904）年に増築された和館が妙壽寺へ、それぞれ移築された。跡地にソ連大使館が竣工したのは昭和3（1928）年である。4

妙壽寺と内田祥三

「内田祥三（よしかず）（1885-1972）」の名前をご存じだろうか。東京帝国大学総長で、安田講堂など「内田ゴシック」と称される一連の建物を設計し、大正から昭和期の建設界を牽引した著名な建築家である。内田家は深川の米穀商で、当時深川猿江にあった妙壽寺の古くからの檀家であった。その縁から祥三は、関東大震災で被災した妙壽寺が深川から世田谷へ移転する際の建築面でのサポートをしたと伝わっている。震災後に住み手不在となった鍋島子爵邸を妙壽寺に紹介し、移築して客殿とした経緯にも祥三の関与があったようだ。

その後、祥三の息子と孫も建築家となり、歴代住職とともに建物の保全と歴史調査をすすめてきた。そして平成20（2008）年に世田谷区指定有形文化財となる。

今般特別に客殿2階の大広間を拝観させて頂いた。高さのある折上げ格天井や、座敷をぐるりと囲む縁側のガラス戸が実に見事だ。鍋島家では、畳の上に椅子とテーブルで外国人客を接待していたという。明治末～大正期の大名華族の生活空間を体感できる貴重な空間である。1 2 3

内田祥三は麻布との縁も深い。4才で父を亡くした祥三を女手ひとつで育てた母の実家は麻布竹谷町（現南麻布1丁目）にあった。明治42（1909）年に実家を出て独立、新龍土町12番地に居住する（狸穴町移転前の鍋島邸地である。不思議な縁に驚く）。昭和2（1927）年に笄町の堀田坂上（現西麻布4丁目）に自邸を建築し、ここを終の住処とする。書斎の窓からは自身が設計した公衆衛生院（現在港区立郷土歴史館）が見えたという。

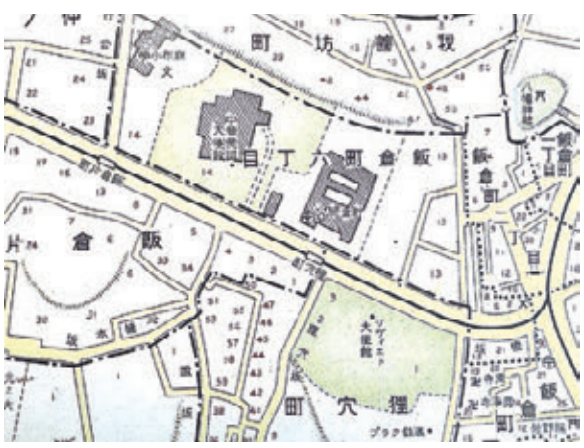
護国寺に残る狸穴町の痕跡

護国寺に移築された旧玄関の建築時期や移築経緯は、現時点では明らかになっていないが、鍋島直和のご息女（大正13年生まれ）が「古い建物の門は護国寺に寄付したと母からよく聞いていた」と語っておられることから、妙壽寺の客殿より古いものであろう。国宝「月光殿」の玄関として丁寧に使用され、美しく保全されている5。また勝手口近くの壁には「麻布 狸穴」と記された金属製のプレートがほぼ完全な形で残っている6。「電気の史料館」に問い合わせたところ、日本初の電力会社である「東京電灯」のプレートであろうとのこと。鍋島家への電力供給開始時期やプレートの貼付時期までは確認できなかったが、麻布区への電気供給は明治24（1891）年に開始されており、その時点で現在の外苑東通りには配電線が敷設されていたという。小さなプレートも貴重な歴史の証人といえるのではないだろうか。

護国寺（旧鍋島子爵邸玄関）

東京電灯のプレート

現在のロシア連邦大使館、敷地の上は空が広い



昭和12（1937）年
地図引用：港区立港郷土資料館『増補港区近代沿革図集 麻布・六本木』2010年

●主要参考文献
三吉廣明『妙壽寺客殿―旧鍋島邸について―』本覺山妙壽寺、2009年
三吉廣明『追想三吉日照上人』本覺山妙壽寺、1991年
『華族名鑑 訂正増補』博文館、1894年
「大使館の歴史」（在日ロシア連邦大使館ホームページ）
「露国大使館移転に関する件」（国立公文書館 請求番号平15財務00232100）

●取材協力・資料提供
法華宗（本門流）本覺山妙壽寺、電気の史料館

（取材・文／八巻綾子）

都税事務所からのお知らせ

４月から固定資産税における土地・家屋の価格などがご覧になれます（23区内）

対象 令和8年1月1日現在、23区内に土地・家屋を所有する納税者
内容 所有資産が所在する区で課税されている土地・家屋の価格など(縦覧帳簿)
期間 4月1日（水）から6月30日（火）まで（土・日・休日を除く）
時間 8時30分から17時まで
場所 土地・家屋が所在する区にある都税事務所

納税通知書は6月1日（月）に発送予定です。詳細は、東京都主税局ＨＰをご覧いただくか、下記へお問い合わせください。

お問合せ／港区にある物件について　港都税事務所
電話／03-5549-3800（代表）

引越しをしたときは、自動車の変更登録の手続が必要です

引越しをしたときは、管轄の運輸支局又は自動車検査登録事務所で自動車の変更登録の手続が必要です。手続が遅れますと、自動車税種別割の納税通知書が届かないなどのトラブルの原因となります。

やむを得ず手続が遅れる場合は、電子申請や電話等により、納税通知書の新しい送付先住所をお知らせください。

お問合せ／東京都自動車税コールセンター
電話／03-3525-4066

都税における納税証明は、すべての都税事務所・都税支所・支庁で申請できます

納税証明はすべての都税事務所・都税支所・支庁で申請できます。ただし、申告・納付後１～２週間以内に納税証明を申請する場合は、①領収証書の原本（領収印のあるもの）②申告書の控え※（受付印のあるもの）の両方を、お近くの都税事務所等の窓口までお持ちください。

※②は申告税目のみ

お問合せ／港都税事務所
電話／03-5549-3800（代表）

災害等により甚大な被害を受けた方に対して都税を減免する制度があります

災害等により甚大な被害を受けた方に対して、一度課税された税金のうち、納期限前のものを被災の程度等によって減免（軽減または免除）する制度があります（納税を猶予する制度もあります）。対象は、固定資産税・都市計画税（23区内）、不動産取得税、個人事業税などです。原則として、納期限（不動産取得税を除く。）までに、納税者ご本人からの申請が必要です。被災の事実を証明する書類を添えて、都税事務所へ申請してください。

お問合せ／港都税事務所
電話／03-5549-3800（代表）

にせ都税メール・電話にご注意ください！

都税事務所の職員を装って、個人情報を不正に取得したり、金銭をだまし取ろうとする事例が発生しています。不審に感じた場合は即答せずに、下記問合せ先までご連絡ください。

また、万が一被害にあわれた場合は、すぐに警察にご連絡ください。

お問合せ／総務部総務課相談広報班
電話／03-5388-2925

麻布地区 地域事業

“ちょこっと立ち寄りカフェ”にお越しください。

麻布地区総合支所では、地域の高齢者の皆さんが気軽に立ち寄って楽しく交流できる場所として、「ちょこっと立ち寄りカフェ」を開催しています。どなたでも気楽な雰囲気でお茶やコーヒーを飲みながら、おしゃべりや季節のイベントなどを楽しんでいただけます。

毎月、麻布地区のいきいきプラザ５館で開催しています。ぜひ、ちょこっと立ち寄ってみてください。地域のボランティアも皆さんのお越しをお待ちしています。

会場及び内容 なお、プログラムは変更することがありますのでご了承ください。イベント、講座、ゲームなどを行っています。

◆飯倉いきいきプラザ　東麻布2-16-11	
3/4（水）	脳トレゲーム「ひらがな作文ポーカー」に挑戦
◆ありすいきいきプラザ　南麻布4-6-7	
3/12（木）	気軽に川柳をつくってみよう
◆西麻布いきいきプラザ　西麻布2-13-3	
3/19（木）	昔の遊びで子供たちと楽しもう
◆南麻布いきいきプラザ　南麻布1-5-26	
3/25（水）	男声合唱コンサート
◆麻布いきいきプラザ　元麻布3-9-6	
3/28（土）	誰でも描ける！かんたん自画像

＊4月以降の開催については、現在調整中です。決まりましたら、区のホームページ等でお知らせいたします。

時　間 毎回　午後1時30分から午後3時30分頃まで
対　象 どなたでも
参加費 無料
申込み 不要です。直接会場にお越しください。

お問合せ／麻布地区総合支所区民課保健福祉係　電話／03-5114-8822

「六本木クリーンアップ特別企画落ち葉拾い＆焼き芋」初開催！

六本木ヒルズ自治会は、1月18日（日）に「六本木クリーンアップ特別企画落ち葉拾い＆焼き芋」を南山小地域防災協議会との共催で初開催しました！

総勢約300名の方々が集い、青空の下で大人の方々中心に周辺地域の清掃活動を、子ども達は六本木ヒルズ毛利庭園での落ち葉拾いを実施。その後六本木中学校の校庭に移動し、焚き火での焼き芋を楽しみ親睦を深めました。

港区麻布地区総合支所に豚汁の炊き出し備品等のご協力を頂き、麻布消防署には子ども達の消火体験や消防車の乗車体験を実施頂くなど、地域ぐるみでのイベントとなりました。参加者の皆様のご近所同士の交流が生まれ、地域の防災力向上にもつながりました。これからも、近隣地域の皆様と手を取り合い、どなたも気軽に参加できる開かれた自治会を目指してまいります。

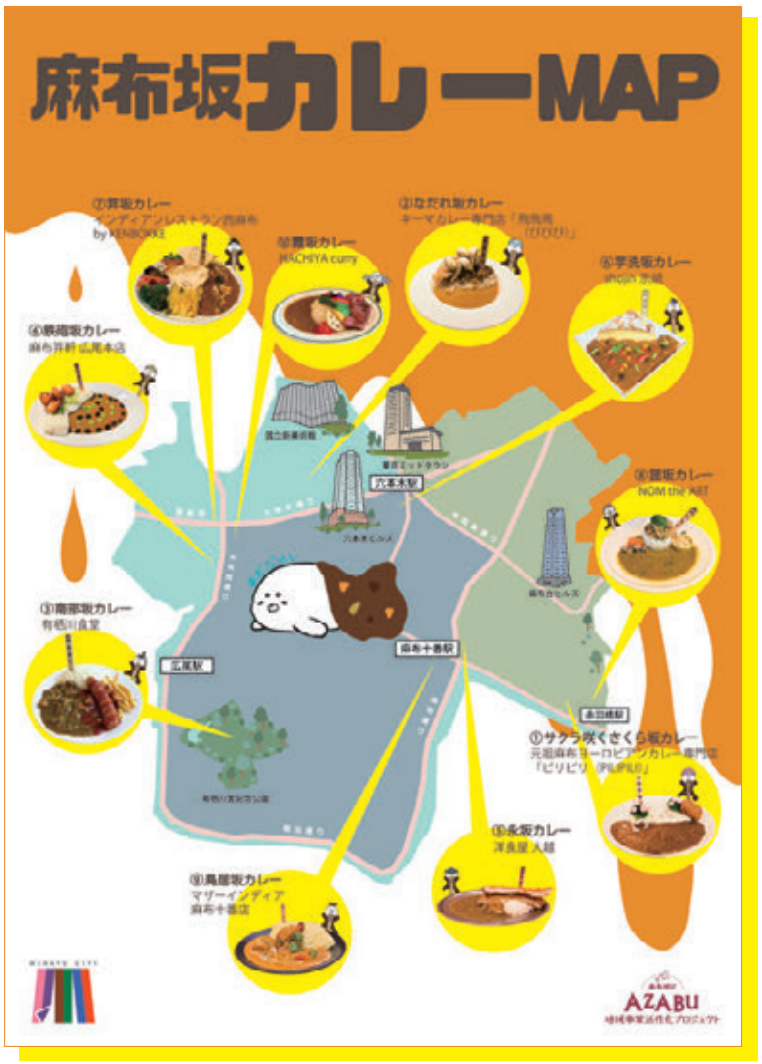
寄稿　六本木ヒルズ自治会

六本木クリーンアップは毎月第3土曜日（原則）に開催しています。皆様のご参加をお待ちしております！
https://www.roppongihills.com/association/cleanup/

六本木ヒルズ自治会の活動情報（Instagram）はこちら。

港区麻布地区総合支所だより

麻布坂カレー 1周年記念！アンケート実施中　味わう喜び、集める楽しみ。あなたのアイデアを募集！



※2026年2月時点のマップです

麻布の魅力を発信するご当地グルメ「麻布坂カレー」は、麻布の“坂”をテーマにした特製カレーを通じて、地域の歴史や魅力を再発見するプロジェクトとして、令和7年1月に提供をスタートしました。

第1弾は3店舗から始まり、現在は12店舗まで拡大。店舗ごとにデザインが異なる「あざぶらし」の標柱を添えて提供しています。集める楽しみも魅力のひとつになっています。

このたび1周年を迎え、さらに麻布の魅力を発信するため、麻布坂カレーに関するアンケートを実施しています。今後期待する店舗やメニュー、イベントなど、皆さまの声をぜひお聞かせください。

アンケートは3月31日まで、二次元コードからご回答ください。

いただいた声が、次の麻布坂カレー誕生のきっかけになるかもしれません！

アンケートは
こちらから

お申込詳細は
こちらから

自分たちのまちを知り、よりよい地域とするために 地域の活動に参加してみませんか

活動期間　令和8年4月1日～令和9年3月31日

活動日　平日の夜間に原則月１回程度
活動によっては土・日曜日等にイベントや取材を実施します

申し込み　申込フォーム・郵送またはFAX（住所・氏名・年代・職業・連絡先・希望の活動を明記）で申し込みください

申込期間　麻布地区地域情報紙「ザ・AZABU」……3月31日（火）まで
麻布地域の魅力伝承事業（あざぶら部）……随時募集しています

募集する協働事業名（①② 20名程度）

①麻布地区地域情報紙「ザ・AZABU」
麻布地区の魅力を発信する地域情報紙「ザ・AZABU」の企画・取材・編集を行います。

②麻布地域の魅力伝承事業（あざぶら部）
麻布地区の今昔の写真やまち歩きで撮影した写真をパネル展やSNS等を通じて公開すると共に、麻布地区の歴史や文化等の魅力を伝えるまち歩きやイベントなどを行います。

申し込み・お問合せ ／麻布地区総合支所協働推進課地区政策担当
（ホームページで申し込みも可能です）
電話／03-5114-8812　FAX／03-3583-3782

地域情報紙「ザ・AZABU」　麻布地域の魅力伝承事業

麻布地域の魅力伝承事業「あざぶら部」～麻布未来写真館～

フジフイルムスクエアミニギャラリーでパネル展（令和８年２月６日～３月５日）を開催

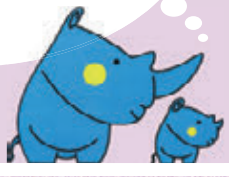
令和7年度は港区平和都市宣言40周年を記念した「戦後～復興」のテーマを中心に麻布の魅力を伝えるパネルを作成・展示しました。

あざぶら部では麻布地区の懐かしい建物や風景、お祭りや行事などの写真や資料をイベントや展示パネルに活用したいと考えています。

もし、お手元に提供していただける写真や資料がございましたらご連絡ください。

連絡先／麻布地区総合支所協働推進課地区政策担当
電話／03-5114-8812

ザ・AZABUへのご意見・ご要望をお寄せくだサイ



住所・氏名・職業（学校名）・電話番号・ご意見・ご要望（日本語又は英語、字数・様式自由）を書いて、直接又は郵送・ファックスで、〒106-8515 港区六本木5-16-45 麻布地区総合支所協働推進課 地区政策担当へ。

●電　話／03-5114-8812
●FAX／03-3583-3782

地域情報紙「ザ・AZABU」はホームページからもご覧になれます。

「ザ・AZABU」は英語版も4カ月後に発行しています。

各支所では、地域情報紙（情報誌）

- 芝地区総合支所「しばタグ」
- 麻布地区総合支所「ザ・AZABU」
- 赤坂地区総合支所「MYタウン赤坂・青山」
- 高輪地区総合支所「みなとっぷ」
- 芝浦港南地区総合支所「べいあっぷ」

を定期的に発行しております。支所内各戸配布のほか、港区立図書館（高輪図書館分室を除く）・各いきいきプラザで閲覧可能です。

ザ・AZABU

●配布設置場所ご案内
六本木一丁目、六本木、広尾、麻布十番、赤羽橋の各地下鉄の駅、ちいばす車内、港区立図書館（高輪図書館分室を除く）、各いきいきプラザ、麻布区民センター、麻布地区総合支所、港区観光インフォメーションセンター等

●本紙掲載の記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。

Staff　飯泉千種　石橋克彦　井上まゆみ　鍵谷芳勝　小坂靖浩　小堀繭子　佐藤正子　関根章好　高柳由紀子　田中亜紀　田中真耶子　田中康寛　冨田弥生　中村麻美　野口大輔　畑中みな子　樋口政則　堀内明子　堀切道子　室治奈　八巻綾子　山崎絢加　Mai S.　Sumiko

編集後記

東京の麻布でも、時々この場所が「村」のように思えてくる。世間は思ったよりも狭く、昔ながらの付き合いやコミュニティが存在している。そうした繋がりが苦手で地方から移り住む人もいると聞くが、東京の真ん中にも同じような「村」はある。結局、田舎であろうと都会であろうと、人と人とが交わろうとすると「半径5メートル」くらいに収斂（しゅうれん）していくのだろう。私たち現代人は自由を謳歌したい一方で、その幸福度は人との関わりに大きく影響するというジレンマを抱えているのである。（山崎絢加）

「みなとコール」は暮らしの疑問にまとめてお答えします！

区役所のサービスや施設案内、催し情報など、お気軽に問合せください。
年中無休／午前8時～午後8時　※英語での対応もいたします。
電　話／03-5472-3710　FAX／03-5777-8752
お問合せフォーム／ https://www.city.minato.tokyo.jp/kouchou/kuse/kocho/iken/form.html

“Minato Call” information service
Minato call is a city information service, available in English every day from 8a.m.−8p.m.
Minato Call: Tel: 03-5472-3710; Fax: 03-5777-8752;
Inquiry submission form: https://www.city.minato.tokyo.jp/kouchou/kuse/kocho/iken/form-inquiry.html